

論 文

ヘレネーたちとイオカステーたち — *Pendennis* と *Henry Esmond* の「天使」たち —

宇貫 亮

序

William Makepeace Thackeray (1811-63) は、ヴィクトリア時代の作家たちの中でも見直しが進んでいないこともあり、従来の先入観のまま古くさい作家と見なされがちで、彼の描くヒロインたちもいわゆる「家庭の天使（*Angel in the House*）」の典型とされがちである。¹本論では、*Pendennis* (1848-50) と *Henry Esmond* (1852) 中のそうした女性たちに焦点を当てて、彼女たちの描かれ方を再検討する。この二つの作品は、片や19世紀を舞台にした半自伝的作品、片や17世紀末から18世紀はじめを舞台にした歴史小説として、彼の小説群中では別系統とされ、これまでなかなか結びつけられてこなかった。だが、執筆順としては続いており、また彼の作品は全て彼の個人的経験や執筆当時の社会や人々への批判的視点が盛り込まれているので、この二作に反映されている関心や考え方、背景にある伝記的事実、創作上の技法などには、共通点や類似点が多い。それゆえ、一つの作品だけではわかりにくい彼のアイロニーや作品の構図を読み解くのに、この二作を結びつけるのは大いに有効と思われる。そうしてアイロニーに満ちた文章と様々なイメージの錯綜に秘められた当時のドメスティック・イデオロギーに対する彼の洞察を解き明かし、Thackeray および「ヴィクトリア朝男性作家」への先入観を再考する一助としたい。

I 「家庭の天使」の別の顔

「家庭の天使」といえば、信仰復興運動と産業革命が同時進行していった18世紀後半から19世紀の英国社会において、男性が必ずしも信仰と一致しない世界で働いている間家庭を守り、男性が家庭にいるときにはその癒し手かつ精神的導き手となることを期待された、‘pure’で‘angelic’な中流階級女性といった側面が思い浮かぶ。だが一方で彼女たちは、一家の女主人として、家政の監督者でもあり、また階級のステイタスの担い手でもあった。²

*Pendennis*は、主人公の Arthur Pendennis (‘Pen’) が田舎まわりの女優 Fotheringay と Emily Costigan と結婚しようとするエピソードから始まる。興味深いのは、ヴィクトリア朝の「俗物 (‘snob’)」の代表とされる Major Pendennis と、「家庭の天使」の典型とされる Helen Pendennis が、ともに Pen の身分違いの結婚を阻止しようとするのである。さらに、ある事情から Helen のもとで Pen と一緒に育てられている Laura Bell (彼女もしばしば「家庭の天使」的女性とされる) は、その話を聞いて次のような反応を示す。

A Pendennis fling himself away on such a woman as that! Helen’s boy galloping away from home, day after day, to fall on his knees to an actress, and drink with her horrid father! A good son want to bring such a man and such a woman into his house, and set her over his mother! (*Pendennis*, 251)³

これらは、彼女たちが、単に「俗物」の対極の価値観を象徴するだけの存在ではなく、一面では社会的な存在としてその社会の世俗的価値観を内在化させ再生産に寄与していてもいることを示していると言えるだろう。

それとともに、この Laura の怒りには彼女の嫉妬が絡んでいることがアイロニカルにほのめかされもする。

Whence came all this indignation of Miss Laura about Arthur’s pas-

sion? Perhaps she did not know that, if men throw themselves away upon women, women throw themselves away upon men, too; and that there is no more accounting for love, than for any other physical liking or antipathy . . . perhaps, finally, she was jealous; but this is a vice in which it is said the ladies very seldom indulge. (*Pendennis*, 252)

Helen Pendennis も、後に Pen が Blanche Amory と親しくなったときに彼女の浮ついた性格を的確に見抜くが、そこでも Helen が ‘jealous’ だとはのめかされ、さらに語り手によって、‘I have no doubt there is a sexual jealousy on the mother’s part’ とまで言われる(*Pendennis*, 298)。また、*Henry Esmond* で、Henry の母親的存在ながら彼に密かな愛情を抱いていた Rachel が彼女自身の娘 Beatrix に魅了されている Henry に語る、Beatrix についての的確だが容赦のない批評にも、彼女の嫉妬が窺える (*Henry Esmond*, 300)。

このように、「天使」的とされる彼女たちには ‘(sexual) jealousy’ がつきまとう。しかも、先の引用中に見られるとおり ‘love’ が本質的に ‘physical liking’ の一種で、Laura の階級意識を露呈している怒りの根源に ‘(sexual) jealousy’ があるとすると、彼女の怒りは、彼女の ‘physical’ な欲望が内在化された社会の規範的価値観にすり替えられたものと考えられる。「家庭の天使」も単なる精神的・道徳的な「天使」ではなく社会的存在でもあると先に述べたが、さらにその根底にはそのどちらの顔をも危うくしかねない ‘physical’ な欲望すなわち ‘sexuality’ が存在することを、Thackeray は鋭く見抜いているのである。

II. 「天使」的女性たちに重ねられた「罪深い妻/母」のイメージ

i) *Pendennis* の ‘Helen’ = ヘレネーたち

‘sexuality’ は彼女たちの名前にも暗示されている。バーレスク的な作風を基盤に持つ Thackeray の作品では、登場人物の名前の持つ意味は見過ごせない。‘The ——’s Wife’ (1843) や *The Rose and the Ring* (1854) では全く ‘angelic’ ならざる女性に ‘Angelica’ と名づけているが、この *Pendennis* と *Henry Esmond* ではより洗練された形で彼女たちの名前にアイ

ロニーを仕組んでいる。

Laura のフルネームは、1箇所ではしか語られないが、Helen Laura Bell である (Pendennis, 98)。つまり、Pendennis の「天使」的女性たちは二人とも ‘Helen’ という名なのだ。これは世界一の美女でトロイア戦争の原因となったとされる不実な人妻の名⁴であり、Henry Esmond ではコケティシユな Beatrix が ‘Helen’ =ヘレネーに譬えられてもいる (Henry Esmond, 266)。

この Pendennis でも、若き Pen が、‘Andromache’s like my mother’ と言い、‘but I say, Smirke, by Jove I’d cut off my nose to see Helen’ という箇所がある (Pendennis, 33)。これは、一見 Pen の若者らしい言葉だが、最重要の女性二人が ‘Helen’ という名であることを考えると意味深長である。

Helen Pendennis には、結婚前に辛い恋の経験がある。Thistlewood という旧姓も暗示的だ。1820年に外相 Castlereagh 子爵 (1769-1822) をはじめとする内閣全員の暗殺を謀り未遂に終わった “The Cato Street Conspiracy” の首謀者として処刑された人物の名が、Arthur Thistlewood (1774-1820)なのである。⁵ (そう考えると、彼女の息子の Arthur という名や、Henry Esmond における Castlewood 子爵という爵位が Castlereagh 子爵と Thistlewood を組み合わせたものと言えるのも興味深い点だが、紙数に限りがあるので別の機会に譲る。) Helen Thistlewood は、婚約者のいる男性との恋で秩序を覆しかけたわけだが、結局社会の圧力でその恋は成就されず、絞首刑後に頭と胴を切り離された Arthur Thistlewood 同様二つに引き裂かれ、後に情熱からではなく理性的な判断として John Pendennis と結婚したのである。

一方の Laura は、そのかつての恋人の忘れ形見なのだが、引き取られた後、一家の主人 John Pendennis がその名に不快感を持ったがゆえに ‘Helen’ という名では呼ばれなくなったとされる (Pendennis, 98)。これは、その名が妻たる ‘Helen’ の抑圧された ‘sexuality’ の存在を顕示するからだと言えるだろう。

‘Helen’ Laura Bell もまた最終的な Pen との結婚前に辛い恋を経験するが、そもそも彼女が子供のころに Pen に好意を抱いた経緯は次のように説明される。

And with whom shall a young lady fall in love but with the person she sees? She is not supposed to lose her heart in a dream, like a princess in the *Arabian Nights*; or to plight her young affections to the portrait of a gentleman in the Exhibition, or a sketch in the *Illustrated London News*. You have an instinct within you which inclines you to attach yourself to someone . . . It is your nature so to do. Do you suppose it is all for the man's sake that you love, and not a bit for your own? Do you suppose you would drink if you were not thirsty, or eat if you were not hungry?

So then Laura liked Pen because she saw scarcely anybody else at Fair Oaks except Doctor Portman and Captain Glanders, and because his mother constantly praised her Arthur, and because he was gentleman-like, tolerably good-looking and witty, and because, above all, it was of her nature to like somebody. (*Pendennis*, 678-79)

Laura がごく限られた身近な範囲から現実的な対象を選んだのは、結婚せずに自活するという選択肢がほとんどなかった当時の中流階級女性の状況を反映している。これは、Pen の初恋が ‘passion’ の捌け口として ‘a young lady to whom he could really make verses’ (*Pendennis*, 32) を求め自ら馬で町に出かけてたまたま見た芝居の女優を対象に選んだとされるのと、対照的である。

だが、Pen と同様に Laura も、自身の欲求の反映として愛情の対象を見出すのだ。Laura の Pen への思いが、のどが渇いたら飲み空腹なら食べるというのと同じく彼女自身の ‘nature’ や ‘instinct’ と結びつけられているのは、既に見た箇所でも ‘love’ が ‘physical liking’ の一種とされていたことを思い出させる。そして、この引用の少し後には、語り手は、‘when after this she came to London, and had an opportunity of becoming rather intimate with Mr. George Warrington, what on earth was to prevent her from thinking him a most odd, original, agreeable, and pleasing person?’ (*Pendennis*, 679) と読者に問いかけさえする。限られた範囲から Pen を見出した彼女が、ロンドンへ移動してその範囲が拡大した結果知り合った George Warrington

に惹かれたのを、ごく自然なこととしているのである。

以上のことを考えると、Pen が ‘Helen’ に会ってみたいと言う先ほどの箇所は、Pen の無自覚的な言葉の形を取りながら、‘pure’ な ‘angel’ とされる母と Laura が共有する ‘Helen’ という名の持つ連想を読者に示唆して、彼女たちも ‘sexual’ な存在であることをアイロニカルに暗示していると言えるだろう。

*

‘sexuality’ は、単に結婚前の恋愛経験に関わるだけではない。既に見たとおり、息子を独占したいと思う Helen Pendennis の願望が ‘sexual jealousy’ と表現されてもいる。それ以前にも、Pen が Fotheringay にうつつをぬかしていることに気をもむ母 Helen に対し Pen が ‘a soothing, protecting air, like Hamlet with Gertrude in the play’ を示すと書かれている箇所がある (Pendennis, 80) が、これも Helen Pendennis に ‘sexuality’ を有する「罪深い妻／母」である Gertrude のイメージが重ねられている点で興味深い。

こうした彼女の ‘sexual jealousy’ は、病気で寝込んだ Pen のもとに駆けつけた際に明確に表面化する。朦朧とした Pen を、彼を英雄のように崇める Fanny Bolton が献身的に看病するのだが、やがて Helen と Laura と Major Pendennis が駆けつける。興味深いことに、病床の Pen を見た Helen は、その時いなかった Fanny の持ち物を Pen の寝室から排除するだけでなく、Major Pendennis とさらには Laura までも締め出してしまう (Pendennis, 658)。

Helen Pendennis は、Laura を引き取ったときから彼女と Arthur の結婚を望んでいた。だが、この行動は、彼女が息子 Arthur からの愛情をめぐって娘のような Helen Laura Bell とすら一種のライヴァル関係にあることを示してもいる。ここには、‘pure’ な ‘angel’ とされる彼女の、それも無私の愛の典型とされがちな母から息子への愛情の根本にも、驚くべきことに Thackeray は ‘sexuality’ の存在を見出しているということが窺える。

ii) *Henry Esmond* の ‘Jocasta’ = イオカステーたち

上述の Arthur Pendennis と二人の Helen に似た関係は、*Henry Esmond* にも見られる。第3代 Castlewood 子爵 Thomas Esmond の庶子と暗に見なされていた Henry は、Thomas の弟で第4代子爵となった Francis の一家に受け入れられ、Francis の妻 Rachel は彼の母親代わりとなり、一家の子供たち Beatrix と Frank は彼の妹や弟のような存在となる。そして、この作品では、実の母娘である Rachel と Beatrix がライヴァル関係になる。

次の引用は、‘Helen’ をめぐる Pen の言動と同様に、Henry の無自覚的な言動に隠された二重の意味を持ちうる名前による暗示を巧妙に利用した箇所である。ここでは、世俗的な価値観で生きる Beatrix の関心を惹くに足る地位を得ようと長らく努めてきた Henry が⁵、彼女を聖書の ‘Rachel’ = ラケルに擬える。

‘. . . How long was it that Jacob served an apprenticeship for Rachel?’

‘For mamma?’ says Beatrix. ‘Is it mamma your honour wants, and that I should have the happiness of calling you papa?’

Esmond blushed again. ‘I spoke of a Rachel that a shepherd courted five thousand years ago. . . .’ (*Henry Esmond*, 357)

また、この少し前では Henry が⁵ Beatrix の軽薄さを揶揄する偽の *Spectator* を書いて彼女に読ませるが⁵、そこで彼は ‘Oedipus’ という筆名を用い、その話に登場する薄情な女性を ‘Jocasta’ と呼んでいる (*Henry Esmond*, 344-49)。

J. Hillis Miller は、Henry 自身は Beatrix を意図しているが読者は彼の真の ‘Rachel’ や ‘Jocasta’ —彼の真の愛情の対象—が Rachel Castlewood であることを理解する、としている。⁶ たしかに、聖書の ‘Rachel’ = ラケルとの連想はもちろん、伝説上の ‘Jocasta’ = イオカステーと ‘Oedipus’ = オイディプスの関係を考えれば、Henry にとって母親代わりでもあり最終的に彼と再婚する Rachelこそが ‘Jocasta’ = イオカステーだとするのは当然

である。

だが、Miller も触れていない一つの興味深い事実がある。*Pendennis* での Laura 同様 Beatrix のフルネームはたった1回述べられるだけだが、実は Gertrude Beatrix Esmond なのだ (*Henry Esmond*, 228)。*Pendennis* にも言及があったとおり、‘Gertrude’ は Hamlet の母の名でもあり、偽 *Spectator* のエピソードは *Hamlet* 中での母 Gertrude の性的な罪深さを非難する劇中劇を連想させる。しかも、Henry の実の母の名は Gertrude Maes である (*Henry Esmond*, 274)。彼女は Thomas Esmond に誘惑され Henry を身籠った女性で、結局正式に結婚したとされてはいるが、彼女がその後修道院で名乗った名前 ‘Marie Madeleine’ はその性的な罪深さを暗示している (*Henry Esmond*, 277)。

そのような名を Beatrix が持っていることを考えると、一見対照的な「天使」と「娼婦」である Rachel と Beatrix が、ともに ‘sexuality’ を有する「罪深い妻/母」たる ‘Jocasta’ = イオカステーとして同一性を有していることになる。この作品では、*Pendennis* よりもさらに複雑で巧なやり方で、Rachel も決して ‘pure’ な ‘angel’ ではないことを暗示していると言えるだろう。

Ⅲ. Thackerayの女性像の背景

Thackeray のこうした女性像を考えるには、伝記的事実を無視できない。*Pendennis* 中で、‘If the secret history of books could be written, and the author’s private thoughts and meanings noted down alongside of his story, how many insipid volumes would become interesting, and dull tales excite the reader!’ と書き、さらに George Warrington と Pen に個人の体験を基に作品を創作することについて議論させている (*Pendennis*, 518-21) ように、作品の創作と作家の個人的体験の関係は彼にとっても大きな関心事であった。この二つの作品の女性像を考える上で特に興味深いのは、彼自身の母 Mrs. Carmichael-Smyth (1792-1864) と友人の妻 Mrs. Brookfield (1821-90) である。

Thackeray の母は、娘時代に家族の企みで相思相愛の男性と仲を裂かれ、

インドに送られて Richmond Thackeray と結婚して彼を産んだ。その後、奇妙な巡り合わせで、死んだと聞かされていたそのかつての恋人とインドで再会し、数年後に夫が死ぬと彼と再婚して Mrs. Carmichael-Smyth となったのである。

さらに、Thackeray は、1852年のある書簡で次のように書いている。

It gives the keenest tortures of jealousy and disappointed yearning to my dearest old mother (who's as beautiful now as ever) that she can't be all in all to me, mother sister wife everything but it mayn't be – There's hardly a subject on which we don't differ. And she lives away at Paris with her husband a noble simple old gentleman who loves nothing but her in the world, and a jealousy after me tears & rends her. Eh! who is happy? When I was a boy at Larkbeare, I thought her an Angel and worshiped her. I see but a woman now, O so tender so loving so cruel. My daughter Anny says O how like Granny is to Mrs. Pendennis Papa – and Granny is mighty angry that I should think no better of her than that. (*Letters*, III, 12-13.)

これを見ると、Helen Pendennis の辛い恋だけでなく、息子への独占的な愛情と 'jealousy' もまた、母をモデルにしているのがわかる。また、Rachel に関しても、Henry が ' [Rachel] had been sister, mother, goddess to him during his youth — goddess now no more, for he knew of her weaknesses . . . ' (*Henry Esmond*, 210) とこの書簡と似た表現で語るのも興味深い。

一方、Mrs. Brookfield と Thackeray の関係は、1848年10月に急速に親密さを増し、同時期の *Pendennis* に影響を与えたうえ、その破局による痛手の中で *Henry Esmond* が書かれることとなった。Gordon N. Ray は、Rachel と Henry の物語は二人の関係を反映しており、彼の Mrs. Brookfield へのアンビヴァレントな感情が投影されている、と論じている。⁷ さらに言えば、Ray は Mrs. Brookfield を Rachel としか結びつけていないが、先述のように Rachel と Beatrix がともに 'Jocasta' =イオカステーだとすれば、この二人は Thackeray にとっての Mrs. Brookfield 像が分裂した女性たちと考え

られる。

さらに、Thackeray は、幅広い読書からも女性たちの苦境や権利の主張などをよく知っていた。Micael M. Clarke は、彼の蔵書にあった初期フェミニストたちの著書を踏まえて、*Henry Esmond* とそれらの関連を論じてもいる。⁸

このように、ジェンダーをめぐる様々な考え方の知識とともに、「妻」や「母」たる女性の置かれた状況や彼女たちの情緒的な葛藤などを深く知ることが、イデオロギー的に美化された ‘Angel’ や ‘goddess’ ではなく ‘a woman’ という認識に基づく Thackeray の女性像につながっているのは間違いないだろう。

IV. 罪深き「天使」たちのたどる道

そのような ‘a woman’ に ‘pure’ な ‘angel’ であることを求めるのは、ある意味では対等な人間と見ていないということでもある。*Pendennis* の語り手は、Helen と Laura について、男性読者を想定して、‘These women were made for our comfort and delectation, gentlemen — with all the rest of the minor animals’ (*Pendennis*, 252) と皮肉っぽく述べている。

しかし、単に男が女を虐げるだけではない。

Women are cruel critics in cases such as that in which poor Fanny was implicated; and we like them to be so; for, besides the guard which a man places round his own harem, and the defences which a woman has in her heart, her faith, and honour, hasn't she all her own friends of her own sex to keep watch that she does not go astray, and to tear her to pieces if she is found erring? (*Pendennis*, 676)

Thackeray は、Pen に、‘Make a faith or a dogma absolute, and persecution becomes a logical consequence’ (*Pendennis*, 797) と語らせてもいる。他の女性たちに対し ‘cruel critics’ となる Helen Pendennis や Rachel は、「天使」を求めるイデオロギーを内在化させてそれを ‘absolute’ なものとし、それに反する女性たちに ‘persecution’ を行っていると言えるだろう。

また、男性の側も決して一方的な支配者ではない。Thackeray は、「奴隷（‘slaves’）」たる彼女たちが、彼女たちに奉仕されるのを当然視する無気力な「専制君主（‘despot’）」を作り出している面も指摘している。

What had made Pen at home such a dandy and such a despot? The women had spoiled him, as we like them and as they like to do. They had cloyed him with obedience, and surfeited him with sweet respect and submission, until he grew weary of the slaves who waited upon him, and their caresses and cajoleries excited him no more. . . . Does this, like the former sentence, run a chance of being misinterpreted, and does anyone dare to suppose that the writer would incite the women to revolt? Never, by the whiskers of the Prophet, again he says. He wears a beard, and he likes his women to be slaves. What man doesn't? What man would be henpecked, I say? We will cut off all the heads in Christendom or Turkeydom rather than that.

(*Pendennis*, 677-78)

ここで、Thackeray は、彼一流の支配／被支配関係に対する相対的な視点を示している。彼は、彼女たちのそうした行動が男性にとって都合がよいことも見逃さず、当時一般的だった偏見を逆手にとって預言者マホメットを引き合いに出しながら、女性を男性に奉仕する「奴隷」とするようなイデオロギーを当然視している読者に皮肉な言葉を向けているのである。

*

このようなイデオロギーで「奴隷」化された‘Helen’＝ヘレネーたちや‘Jocasta’＝イオカステーたちは、いかなる道を辿るのだろうか？

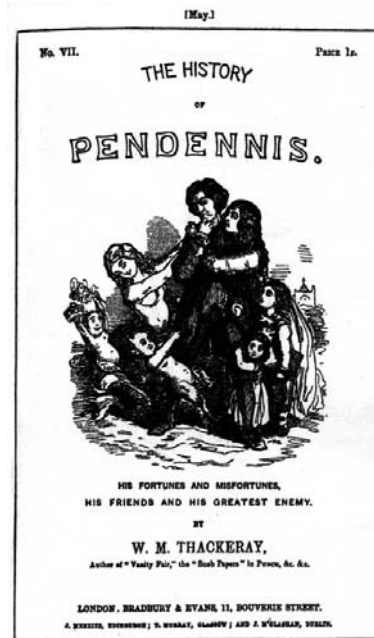
Helen Pendennis は、Fanny をめぐる Pen との諍いの和解の後他界し、その後 Pen と Laura の記憶の中で彼女の欠点は忘れられ純化される。そして、Laura に彼女のイメージが重ねられる (*Pendennis*, 941) だけでなく、Pen 自身も母に似ていると言われるようになる (*Pendennis*, 967)。当時の代表的

なコンダクト・ブックである Sarah Stickney Ellis (1812-72) の *The Daughters of England* (1842) に ‘An able and eloquent writer on “Woman’s Mission,” has justly observed, that woman’s strength is in her influence’⁹⁾ とあるように、当時女性の力は ‘influence’ にあるとされていた。彼女は、いかなれば、生身の肉体と ‘sexual jealousy’ を失うことで、まさにドメスティック・イデオロギーそのものと言ってもよい純粋な ‘influence’ となりえたのだ。

これに対し、Rachel は、いわば生身であり続けた Helen Pendennis である。Henry と彼女の間の娘によるとされる Preface でも、強い ‘jealousy’ を持つ Rachel が、最初の夫同様 Henry も崇拝するとともに束縛し、自分と同名の娘をもライヴァル視したことが語られる (*Henry Esmond*, 9)。

ここに示す絵は「ヘラクレスの選択 (‘the choice of Hercules’)」という古典的モチーフに基づいた *Pendennis* 分冊刊行時の表紙だが、王冠や馬車に象徴される世俗的な地位や財産が性的に誘惑する女性と同じ ‘Vice’ もしくは ‘Pleasure’ の側に置かれて ‘Virtue’ を表す家庭の妻と対比されている構図は、基本的に *Henry Esmond* にも通じる。だが、Henry は、Beatrix への幻滅と世俗的成功の希望の喪失とともに ‘the drama of my own life was ended’ と語り、Rachel とその名も象徴的な Virginia に渡った後は世捨て人同然で、彼女と暮らす幸せを述べつつも深い憂鬱を漂わせる (*Henry Esmond*, 461-62)。

結局どちらの女性も真の幸せをもたらさないのは、一見対極的な両者が実は分裂した女性像にすぎないためと言ってもよいだろう。これは、一つには



[Facsimile of wrapper to one of the original monthly numbers.]

Facsimile of wrapper to one of the original monthly numbers (*Pendennis*, xliii)

前述のとおり Mrs. Brookfield 像の分裂であり、さらに言えば社会的な義務や道徳観が女性一般にもたらす分裂でもある。そして、「主人」のはずの男性は、一面では、自分たちを「主人」とするイデオロギーとそれによって分裂させられ「奴隷」化された女性に支配される「奴隷」でもあるのだ。

*

*

Laura は、辛い恋の後、かつて誘惑に弱い Arthur を責めていた自分が他の男性に惹かれたことに良心の呵責を感じ、自分の内にある罪や過ちや弱さを自覚して謙虚になり、他人のそうしたものにも寛容になる。この態度は *Pendennis* の語り手の最後の言葉にも通じる。

... we see flowers of good blooming in foul places, as, in the most lofty and splendid fortunes, flaws of vice and meanness, and stains of evil; and, knowing how mean the best of us is, let us give a hand of charity to Arthur Pendennis, with all his faults and shortcomings, who does not claim to be a hero, but only a man and a brother.

(*Pendennis*, 977)

最後の 'a man and a brother' という言葉は、奴隷解放運動の有名なスローガンの一部である。Deborah A. Thomas は、これを 'slave' と同義とし、Pen が最後に現実の様々なしがらみに囚われた「奴隷」となる、と言っている。¹⁰ たしかに、この言葉は一面で Pen が現状として「奴隷」であることを示している。そして、この言葉が彼を他の人々と変わらぬ存在とすることは、世間の人々も皆同様に現実の「奴隷」だと暗示しているとも言える。しかし、本来 'a man and a brother' であることを求めるといことは、そうした「奴隷」の境遇の不当さとそれからの解放の訴えも含むはずだ。さらに、この文章は、まさにこの言葉ゆえに、Pen のみならずあらゆる人に対して皆が相互に Laura のような自己省察に基づく寛容さを持つことの訴えとなっているのである。

結

以上のように、Thackerayは、執筆当時のイデオロギーにおける理想と言うべき「天使」的女性たちに、かなりきわどい性的な問題を抱える「罪深い妻／母」のイメージを重ねている。そうすることで、彼は、当時のドメスティック・イデオロギーに欠落している（もしくはそれが目を背けようとしている）生身の女性の実像を巧妙かつ大胆に示しているのだ。

社会の圧力の中で彼女たちの‘sexuality’は抑圧され、社会的な存在として、階級のステイタスに見合った結婚をし、夫に奉仕する「奴隷」となることが求められる。一面ではこれは男性からの身勝手で暴君的な押し付けだが、彼女たち自身もまたその価値観を内在化させ、その再生産の共犯となる。だが、彼女たちの‘sexuality’は消え去ったのではなく、折にふれ表面化する。そして、生身の人間である限り完全に‘pure’な‘angel’にはなりえないにもかかわらずそうあろうとすることが、自身および他者への束縛や抑圧につながるのだ。

結局、‘Vice’もしくは‘Pleasure’側の女性だけでなく、‘Virtue’側の「家庭の天使」的な女性も、決して男性に真の幸せをもたらさない。「ヘラクレスの選択」の結果は、伝説の英雄と同様に、彼の愛を独占しようとする家庭の妻の‘jealousy’がもたらす毒で男が苦しめられることになる。男性は単なる暴君ではなく、自身もまたそのイデオロギーによる「奴隷」化を免れないのだ。Lauraの最終的な見識やPendennisの語り手の最後の訴えは、現実の「奴隷」状態を脱する困難さを認識しながら、自己省察に基づいて生身の人間の真実をありのままに認め寛容さを持つことで、人間がもう少しましなあり方をする可能性を示していると言えるだろう。そして、社会のイデオロギーの重圧を痛感せざるを得なかったMrs. Brookfieldとの破局を背景に持つHenry Esmondでは、分裂した女性像が様々な二項対立的価値観と結びつき、最終的にはそのいずれもが不満足な結果に終わるのである。

注

本稿は、2007年11月17日に日本大学文理学部で開かれた日本ヴィクトリア朝文化研究学会第7回大会での口頭発表「ヘレナーたちとイオカスターたち—サッカーの見た『家庭の天使』の仮面の下」の原稿に加筆・修正したものである。

1. 例えば、川本静子著『〈新しい女たち〉の世紀末』（みすず書房、1999年）p.12、廣野由美子著『虚栄の市』—〈家庭の天使〉像の崩壊—（英宝社、内田能嗣編『ヴィクトリア朝の小説—女性と結婚—』所収、1999年）p.166を参照。
2. Elizabeth Langland, *Nobody's Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1995), ch. 2 参照。
3. 以下、Thackeray の作品からの引用は、下記の Oxford World's Classics 版により、本文中で括弧内に作品名と頁を示す。
The History of Henry Esmond, Esq., ed. Donald Hawes, 1991.
The History of Pendennis, ed. John Sutherland, 1994.
 また、書簡からの引用は、下記の書簡集により、*Letters* と略記して巻と頁を示す。
The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray, 4 vols., ed. Gordon N. Ray, Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1945-46.
4. 'Laura Bell' という名が当時の有名な高級娼婦と同じ点も指摘されているが、現時点ではその関連性の確証はない。Micael M. Clarke, *Thackeray and Women* (Dekalb: Northern Illinois University Press, 1995), p.143 参照。
5. Marjorie Bloy, 'Arthur Thistlewood'. *A Web of English History*. 15 Nov. 2007. <<http://www.historyhome.co.uk/c-eight/people/thistle.htm>>
6. J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1982), p.102.
7. Gordon N. Ray, *Thackeray: The Age of Wisdom, 1847-63* (1958. New York: Octagon-Farrar, 1972), pp.180-88.
8. Micael M. Clarke, *op. cit.*, ch. 5 参照。
9. Sarah Stickney Ellis, *The Daughters of England: Their Position in Society, Character & Responsibilities* (London: Fisher, Son, & Co., [1842]. 12 Jun. 2008 <<http://www.archive.org/details/daughtersofengla00elliuoft>>), p.3.
10. Deborah A. Thomas, *Thackeray and Slavery* (Athens, Oh.: Ohio University Press, 1993), p.86.